



探訪

経営者

INTERVIEW

私たちは新しい価値を 創造し続ける製造工場です 株式会社 新越ワークス

業務用・家庭用調理器具「ThreeSnow」、アウトドア用品「UNIFLAME」、木質ペレットストーブ「warmArts」の3事業部門を運営する株式会社新越ワークス。今回は、山後佑馬社長から沿革や最近の取り組み、今年創業60周年を迎えるにあたり今後の展開などについてお話をうかがいました。

■ 御社の沿革および事業内容について お聞かせください

創業は1963年。私の祖父、山後信二が“ざる”など金網を用いた業務用の調理器具を製造する「新越金網製造工場」を立ち上げました。その後、1970年には「新越金網株式会社」として法人化し、創業50周年を経た2014年に「株式会社 新越ワーク

【会社概要】

会社名 株式会社 新越ワークス
代表者 代表取締役社長 山後 佑馬
所在地 燕市小関670番地
創業 1963年
社員数 114人(2022年4月)
事業内容 業務用・家庭用調理器具および関連製品、アウトドア用品、木質ペレットストーブ等の製造販売

ス」に社名を変更しました。

現在、当社は3つの事業部制をとっており、創業からの事業を引き継ぐ業務用調理器具「ThreeSnow（スリースノー）」の製造販売を手掛ける『スリースノー事業部』、アウトドア用品「UNIFLAME（ユニフレー



▲燕市小関にある本社

ム)」を扱う『ユニフレイム事業部』、木質ペレットストーブ「warmArts (ウォームアーツ)」の製造から販売まで行う『エネルギー事業部』で構成されています。

各事業部とも、当社の培ってきた技術力を活かして製品開発を進めていますが、それぞれターゲットとしている市場が異なるため、今回のコロナ禍のような外部環境の変化に対してリスク分散ができ、経営基盤の安定につながっています。

また、当社がこうした多様な製品を開発できる背景には、この地域ならではの特性があります。この地域は様々な金属加工業が集積した「ものづくり」のまちです。当社はステンレスの網材・線材加工を得意としていますが、当社が製造設備を持たないステンレスのプレス加工やプラスチック成型、表面加工などを専門とする工場も域内にあります。それぞれが得意分野を活かし、足りない部分は補い合う。そうした分業体制がこの地域の歴史の中で根付いています。自社工場だけでは作れる製品に限界がありますが、「どのような加工も地域内で対応できる」という強固なネットワークが当社の強みでもあります。

■ 『スリースノー事業部』では、主にどのような製品を取り扱っているのですか

「スリースノー事業部」で扱う製品は、業務用の調理器具です。プロが毎日使用する道具なので、製品には日々の過酷な業務でも壊れない耐久性が求められます。そのため、当社では激しい湯切りでも変形や



▲「ThreeSnow」ブランドとして業務用・家庭用調理器具を製造販売



◀「ラーメン専用パワーてぼ」一般的なてぼに用いられるワイヤーの太さの二倍の強度を持つワイヤーを使用することで、抜群の耐久性を実現

破損しない“てぼ”や、脚を金網一体成型した衛生的な“ざる”など、丈夫で実用的な製品の開発・製造を行っています。また、持ち手の素材、深さ、網目の大きさ、形状など種類も幅広いので、オーダーメイド感覚で自分に合った製品を選べること、そしてその使いやすさもプロの料理人から好評を得ています。

また、「スリースノー事業部 東京営業所」では、こうした技術を活かして、一般家庭向けの調理器具も手掛けており、生協やTV通販などを通じて販売しています。

■ 御社のアウトドア用品「UNIFLAME」も人気です

今でこそ当社の「UNIFLAME」はアウトドア用品として広く認知されていますが、開発のきっかけは、全く異なるものでした。現会長である父が入社した当時（1984年）、LPG（液化石油ガス）燃焼器具の部品開発依頼を受け、今でいう社内ベンチャー的に、ガス燃焼機器部門を立ち上げたのが始まりです。ですから、当時、製造していた製品は、カセットボンベを利用した工芸用の手持ち式バーナーや携帯用のガスヒーターなどでした。そこからキャンプ用品に発展していったのは、現会長が学生時代に山岳部に所属しており、山が好きだったことも影響しているのでしょう。1989年に屋外でも使えるカセットボンベ使用の「ツインバーナー US-2000」を発売し、それが初のキャンプ専用ガスコンロとしてヒットし、今も「UNIFLAME」を代表する製品となっています。

そして、現在では、改良を重ねた「ツインバーナー



▲(写真左) 2023年2月に発売された、ソロユーザーが使いやすいサイズの焚き火台「ファイアグリルsolo」
 (写真中央) カートリッジ式ガスコンロ「ツインバーナー US-1900」
 (写真右) 黒皮鉄板製のダッチオーブン

US-1900」のほか、焚き火台の「ファイアグリル」、テーブルやテント、ダッチオーブンなど、その製品アイテムは350種類を超えています。

このように、「UNIFLAME」が多くのキャンパーから支持されている訳は、当社の業務用調理用品と通じる点がありますが、実用性に優れており、壊れにくいという点ではないでしょうか。さらに、屋外に持ち歩くことを想定し、軽くてコンパクトであることも重視しています。設計段階から余計な機能は極力取り除き、耐久性とシンプルさを求めて製造してきた製品は、流行に流されずに幅広い層で長く愛されています。

ここ数年は、キャンプ用品などアウトドア市場は盛り上がりを見せてきましたが、直近では一過性のブームは終わりつつあります。しかし、その一方で、一人でキャンプをしたり、冬のキャンプを楽しんだり、キャンプの仕方にも新たな展開が見られるようになりました。市場が落ち着いてきた今をチャンスと捉え、次なるステージへの準備を着々と進めていきたいと考えています。

■ 木質ペレットを使ったストーブにも近年関心が高まっています

木質ペレットは、間伐材等の木材を細かく碎き乾燥させ、粒状に圧縮成形した固形燃料です。

2009年から、当社ではこの木質ペレットを燃料としたストーブを「warmArts」というブランドで

製造・販売しています。近年は、コロナ禍による在宅時間の増加で、自宅で暖炉のように火のぬくもりや寛いだ雰囲気を楽しみたいという需要が高まっており、販売台数は増加傾向にあります。

ペレットストーブは、本物の火を楽しめる薪ストーブの良さを備えつつ、価格も手ごろで設置も簡単なところが利点ですが、薪ストーブに比べて認知度がまだ低いことが課題です。しかし、言い換えれば、これからの開拓余地が大きい市場であると言えます。

普及に向けて業界全体の底上げが必要ですが、その追い風となってくれると期待しているのが、来年から始まる木質ペレットのJAS規格（日本農林規格）化です。国内でペレットストーブ用として流通している木質ペレットは多くが国産材ですが、これまで品質規格による規制がなく品質のバラつきがあるのが実情でした。2011年に木質ペレットの業界団体が自主規格を設けたことで、品質は改善しているの



▲レトロなデザインが人気の木質ペレットストーブ「warmArts」

ですが、今後JAS規格化されることで、さらに品質が安定した木質ペレットが流通されるでしょう。そうなれば、ペレットストーブの性能も今以上に高めることができます。ひいては、ペレットストーブの潜在的な需要を掘り起こし、市場の拡大に向かっていくことが期待されます。

また別の側面では、木質ペレットの需要拡大は、石油や電気に代わる再生可能エネルギーとしての活用、未利用の間伐材や放置されている倒木等を再利用することで日本の森林を維持・回復することにも繋がります。

石油や電気料金が上昇傾向にある今日では、相場の変動が少ない木質ペレットは価格面でも競争力が高まっていると言えます。ただし、スイッチ1つで暖まるエアコンに比べたら、ペレットストーブは燃料を燃やすために着火材で火をつけ、暖まるまで数分かかるなど、手間と時間がかかります。しかし、そのひと手間も楽しむことができるほど、ペレットストーブの炎は暖かく、私たちの心にゆとりと安らぎを与えてくれるはずです。

■ 若い社員も多く、社内に活気があります

ここ10年くらい新卒採用を増やしてきた結果、若い社員が増えて、今では20代が全社員の3分の1を超えています。当社は今でこそ、これだけの若い人材が集まってきてくれますが、新卒の募集を始めた10年前は、全く人気がありませんでした。募集しても1次募集では全く希望者が集まらず、2次募集でようやく数名来てくれる程度でした。その流れを変えたのは、労働条件の改善です。全社で残業削減に取り組んだこと、そして、完全週休2日制度を導入したことが大きかったようです。特に休日はこの地域独自の産業カレンダーに合わせてきましたが、若い社員が増えるにつれて、土曜日の勤務に違和感を持つ人が多くなってきたのです。もちろん、社内には賛否両論あり、土曜日は平日に出来なかつ

経営方針

私たちは新しい価値を創造し続ける製造工場です。私たちの製品は世の中の役に立ち、多くの人に喜びを与えます。

私たちの作業は常に改善を繰り返し、「もったいない」ムダを減らし続けます。

私たちの会社は世の中の要求と期待にこたえ、存在価値を高め続けます。

た業務を片付けられる貴重な時間だと継続を希望する社員もいました。しかし、段階的に週休2日制を導入するなかで、業務を洗い出し、徹底的に無駄な業務を減らしていくと、稼働日が減少したにもかかわらず、生産性は向上していきました。また、休日にしっかりと休むことで、既存社員の仕事ぶりも変わってきたのです。完全週休2日制は、当社が先駆的に行ってきましたが、その動きはこの地域でも広がりがつつあります。

■ 今年創業60周年を迎えます。 ■ 今後の事業展開をお聞かせください

当社の経営方針に「新しい価値を創造し続ける製造工場」と記しています。それを体現するためには、当社が培ってきた技術力をさらに磨くこと、そしてそこに新たな技術の風を吹き込み、変化をし続けることが必要です。

当社の業務用調理器具もキャンプ用品も、お客さまが漏らした「こんなことに困っている」という声から誕生しています。今後もそうした形にならないお客さまの潜在的なニーズを掘り起こし、新たな製品をこの地域の協力工場とともに創り上げていきたいと思えます。

先ほども申し上げたとおり、当社の強みはこれまでの諸先輩方が築いてきた技術力とこの地域ならではの分業体制です。この地域だからこそできるものづくり。それを大切に引き継ぎ、次の10年に繋げていきたいと思っています。

(2023年1月30日取材 柴山・生亀・神保)